

研究通信

第90

1973年12月刊
村落社会学会
事務局

中央大学
文学部社会学研究室

志摩・合歓の郷大会に参加して

中村正夫（九州大学）

十一月のなかば、事務局より志摩・合歓の郷大会の印象を書くように、との要請があった。そのときは、村研にはかねてお世話のなかり放しなので、応諾の旨を折返し返事しておいた。ところがいざとなると、予期していなかったことだけになんの拠り所もなく、浮んでくるのは断片的な想い出ばかり。とかくの駄弁を弄するばかりで、ろくなしろものにはなりそうもない。せっかくの機会を与えていただいた事務局に、かえってご迷惑をかける結果となってしまった。

とはいうものの、私じしん合歓の郷大会にはかなり積極的な気持ちのぞんだ。が正直なところ、本年度の共通課題に特別の関心があったから、というわけではない。いささか不謹慎な言草だとは思いますが、ご勘弁願いたい。実情はこのようなことである。

前年度の千葉・鴨川大会での総会場で、いち早く本年度開催地の

目安が付き、場所は志摩地方、設営はこの地方をフィールドとしてすでに多大の研究成果をあげられた愛知大学の担当と決定したとき、すでに参加を決定していた。鴨川大会の前は、そうはいかなかった。むしろ返り新参のそれにも似た逡巡さえ感じていた。もともと大会参加はこんどを加えても通算四回、従来とてけっして積極的な会員とはいえなかった。でも私にとって村研が準拠枠としてもつ比重はかなり大きい。この内なる意識と現実に参加しなかった（一）できなかった）ことの間ギャップ、それは多かれ少なかれ客観情勢のしからしむるところ。阻まれてきた出足がどうやら解かれはじめたのが昨年からで、足どりもたどたどしだったというものである。

しかし鴨川大会に出席してみても、いちおうの瀬踏みがすんだという身軽さ、それに私にとって伊勢・志摩は処女地、よかれあしかれパール・ラインと愛称されるようになったこの地方の水先き案内は、余人を許さぬ愛知大学。いってみればそうした魅力であった。

大会前日の早朝、新大阪駅着。大阪で教時間、知人との逢瀬をすこして午後二時過ぎの近鉄特急で綿方へ。始発の難波から偶然原宏会員と乗り合せ、車中の快談を楽しむうちにも伊勢路にかかると、窓外の秋空には、めったに見られない巻雲、巻積雲（いわし雲）の見事なひろがりがあった。——約三十年來、雲を観る習性をもつ私にとっては、この爽快なカムロ・シラスは志摩大会が用意してくれたかっこうの舞台装飾のように思えた。

鳥羽を過ぎてから特急は頻りに停車して鈍行なみ。さかんに不平をならす隣席の青年に和したのがきっかけて、四方山話がはじまっ

た。聴けば土地の人で真珠の加工技術者であった。万博に際して近鉄の志摩鉄道買収乗入れ、いまのところ赤字覚悟の先行投資だが、ホテル建設をはじめ近鉄の観光開発に寄せている関心は只事ではなからしい。それをうける地元では、伊勢湾台風をおいかけたのナリ津波からようやく立直りかけた真珠養殖加工業者が、さきのドルショックに廃業倒産を余儀されたところに、逆に昨今の輸出好調にただ指をくわえて傍観しているほかないとか。しかし志摩の漁業はいぜん活況を呈し、伊勢えび解禁、干魚製造のシーメン到来にわく志摩漁村の現状など、思わぬ話題の展開にしばし時を忘れた。

鶏方着は一時間近い延着。すでに日暮れ。駅前で同じ列車で到着した松本通商会員と出合い、三人タクシーに同乗、やがてホテル合歓に着いた。夜目には、あとで知ったような合歓の郷の景観はわからない。受付をすませて割当ての部屋にはいると、そこはベット・ルームである。夕食は食堂でのセルフ・サービス、酒気ぬきとあって当てはずれ。「志摩」に泊りたいイメージは中途からしだいにあやしくなってくる。ときに消息通の話で、合歓の郷は日本楽器が最近開発した保養地であり、このホテルは主として系列下にある全国の音楽教室に配属される教師やその卵の研修に利用される施設らしいことがわかった。げんにそれらしい若い女性が溢れていて、野暮な私など場違いの感じ。

しかし、それとてわれわれの懐具合を勘案されての愛知大学の格別の配慮によるものとわかってみれば、これもまた大いに興趣のわくところでもある。そればかりでなく、辛党の多い村研メンバーの

心中をさき取りされてか、川越淳二会員ほかの愛知大学関係者によって禁断の和洋銘酒があらかじめ部屋に持ち込まれていた。後続の会員諸氏の顔触れがあらかた出揃ったところで、それを供されたときにはすでにあきらめていただけに有難かった。

前夜の眠り薬の身かけて、心地よい寝覚めを迎えた翌朝は大会第一日目。ホテルからほど隔たミュージックキャンプの本部内に研究会場が設けられていた。ここまできると、もう無用の饒舌は終らなければならぬ。

二日間わたる研究会は自由報告四、課題報告四、そのあと三時間余の共同討議がスケジュール化されていたわけだが、村研で定形化されたこの編成は、本年度もさしたる問題を残さなかったのではないだろうか。私など共通課題によって大いに現時的問題関心を喚起される。それはそれとして貴重であり、設定された課題がそのままその時点での農業・農村のおかれてきた問題状況を反映してきたという実績がある。だが、なお独自の特殊領域にかかわっているものにとつては、自由報告の枠があることで、ヴァライエティのあるモノグラフに接することができし、みずからもまた報告の機をうかがうすがにもなる。まして、今回のように自由報告を通じて共同討議に付することができれば、今回のように自由報告を通じて共同討議に付することができらば、いも有り得るであろう。

共同課題「現段階における都市と農村の対立の諸形態」。共同討議にさき立って意見宿題委員より経過説明。そこで述べられたように、各報告は三回の研究会の積み重ねによって選ばれたもの――まず時期的に大きく戦前と戦後現時点にわけられた八対立の諸形態

そのものである。前者は早くから通信に予告して本課題を強力に推進した岩本報告。つまり(1)日本資本主義の成立過程において資本が農村・農業をどう利用(？)したか、その具体例としての長野県下における製糸業の発展と労働力の徴発をめぐる問題が提起された。後者は内容的に三つの形態——(2)従来の議論の批判的継承をおこなうという立場からの一般化(用意された具体的分析は割愛)、すなわち日本資本主義発達過程における小農民的経営の歴史的段階的な性格規定の上に立って現段階のそれを位置づけようとした東報告、(3)危機に直面している日本農業、なかんずく自作農的土地所有、小経営それ自体の存否を問いかげながら、新潟県下の先進的な水稲作地帯における新しい対応形態としての請負耕作を成立させたメカニズムを分析した多々良報告、(4)戦後資本主義がナショナル・プロジェクトとして推進した鹿島開発による新都市形成が、既存の農業、農村に与えた外圧とそれに対する対応をとりあげた安原・吉沢報告が続いた。

これら諸報告をめぐる私なりの受けとめ方については、もはや触れる余地はなく、またその必要もないであろう。あえて全体的な感想をいえば、A対立Vは資本対農業のそれとして多く論じられたが、それがそのまま都市対農村の問題を意味するのだろうか、という釈然なさである。それは共同討議の司会、安孫子会員がいみじくも柱として投げかけた、日本資本主義下における「家」ないし「村」、その主眼的条件はどうなっているのか、という問題に通ずる。村研の目玉ともいふべきこのテーマに、はからずもふたたび回帰した感

がないでもない。いぜん未解決、というより新しい問題性をはらむ問題として、それを解明するためには、もっともっと多くの事例についての具体的な分析を用意しなければならぬであろう。そうした感懐のかけで、従来西日本の事例を提供することの少なかった私じしんの怠慢に対する反省があったこともつけ加えておかねばならない。

共同討議ではしかし、もっぱら聴き役にまわるしかなかった私。まだわれながら及び腰のもどかしさを感じながらも、志摩・合歓の郷大会はこうして私に返るべき目標を示してくれたように思われる。村研の宿舍がベッド・ルーム、ホステル合歓は今後における村研大会のイメージ・チェンジを象徴するのではないかと懸念する向きもあった。が私には、さきの共同討議からしても、そうは思えない。さらにその傍証としても最後に付きのことを付言しておきたい。

大会終了後、私は早々にホステルを脱出することにし、この地域に詳しい川越・阪井両会員に適当な宿の斡旋をたのんだ。紹介されたのが浜島港にのぞむ旅籠「紀文」である。推せんの辞にたがわず、気風のいいおかみの接待に飽食するほどの志摩の珍味、しかも格安であった(後日訪問される方のためにあえて記す)。翌朝フェリーで御座に渡り、先志摩を縦走しての迂回の帰路は、やはり予想したとおり志摩の旅情を満喫させてくれたのであった。前事務局ならびに愛知大学関係者諸氏に対して、ここにあって謝意を述べさせていただく。